

これはイエス・キリストの人生、死、復活についてまとめた文書です。著者は記されていませんが、最も古く、信頼できる伝承によれば、著者は取税人マタイです。彼はイエスの十二弟子の一人で、福音書にも登場します。弟子たちはイエスについて見聞きしたこと、イエスの教えを三十年から四十年の間、語り伝えていました。マタイはこれらを編集し特定のテーマに焦点が当たるようにしながら、この文書にまとめたのです。

このビデオでは、マタイの福音書の前半を扱います。聖書全体が描く神とイスラエルの歴史の中で、預言された約束の成就是イエスであるということを、マタイは強調しています。つまり、イエスはダビデの血筋につながるメシアであり、モーセのような権威ある教師であり、またヘブル語のインマヌエルが意味するように、私たちと共におられる神だと記しているのです。

マタイはこの福音書を5つに区切り、前後に導入と結論を配置しています。5つのセクションはそれぞれイエスの長い教えで閉じられています。これは見事な構成です。例えば1章から3章では、旧約聖書の歴史の直後にイエスのストーリーを置いています。マタイはイエスの系図から始めることでイエスがダビデ直系のメシアの家系でありアブラハムの子孫だと示しました。これは彼が神の祝福を全世界に届けることを表しています。その次は有名なイエスの誕生の記事です。これは予言されていた約束の実現でした。救い主を拝む人たちが国々から集まってくること、救い主はベツレヘムに生まれること、そして何よりも聖霊によるイエスの誕生、インマヌエルという彼の名前、それらはすべてイエスが単なる人間ではないことを示しています。彼は人となられた、私たちと共におられる神なのです。マタイの福音書テーマのうち2つを導入部分ですで見ることができました。イエスがダビデの子孫であること、そしてインマヌエルであることです。マタイはさらにイエスが新しいモーセであるとも示しています。つまりイエスはモーセのようにエジプトから出てきて、洗礼という名の水を通り、荒野で40日間過ごされました。そして山に登り、新しい教えを授けられたのです。マタイはイエスこそが申命記に記されているモーセ以上の者であり、奴隷状態のイスラエルを解放し、新しい教えを授け、人々を罪から救い、そして神と人との間に新しい契約を結ぶ者である、と記しているのです。このモーセとイエスの相似関係は、マタイが福音書をこのように構成した理由でもあります。5つのセクションはどれもイエスを教主として描いています。マタイはイエスの5つの教えと、モーセの教えであるモーセ5書、つまりトーラーと重ねているのです。イエスは権威を持って新しい契約を教え、そのトーラーを完成させます。

1つ目のセクションの4章から7章で、イエスは公の活動を開始し、神の国の訪れを宣言します。これが鍵です。この神の国とは全世界を救う神の計画で王であるイエスを通して完成するのです。イエスは悪、特に霊的な悪と悪魔の支配、そして病気と死と戦うために来られました。彼に従いその教えを守る新しい神の家族を作ること、全世界の神の支配と統治を回復するためにイエスは来たのです。そこでイエスは人々を癒し、共同体を立ち上げたのち、弟子たちを丘に連れて行き、山上の説教と呼ばれる最初の長い教えを語られました。その中でイエスは彼に従い、神の国に生きるとはどういうことかを示されます。それは、強者が優遇されることのない逆転の王国なのです。ですから、貧しい者、無名の者、豊かな者、宗教的な者、すべての人々が、悔い改めてイエスに従い、彼の家族に加わるようにと招かれています。イエスは、旧約聖書の立法を無効にするために来たのではなく、むしろご自身の人生と教えを通して成就するためだと述べました。イエスは、神に従う者の心を、神と隣人、敵さえも愛することができるように変えて下さるのです。

神の国に関する教えの後、次のセクションはイエスが神の国を人々の日常生活の中で実現させていく様子を記しています。またそこにイエスが神の国の力を苦しむ人々にもたらす9つのエピソードを収録しました。これらは3つのグループに分けられています。登場人物はすべて病人、障害がある人、危機にさらされている人で、イエスは恵みと力の技によって彼らを癒し、救うのです。これら3つのグループの合間には、イエスが人々に自分に従うようにと呼びかける2つのエピソードが挟まれています。マタイはここで大切なことを述べています。人はイエスに従い弟子になることによるのみ、その恵みの力を経験できるということです。このように神の国の力を示した後、イエスは十二弟子を派遣しご自身と同じことを行わせて活動範囲を広げます。そしてこれは10章の二つ目の長い教えにつながります。ここでイエスは弟子たちに対してどのように神の国を宣言すべきか、またその

後何が起こるかを教えられます。イスラエルの多くはイエスと神の国への招きを受け入れましたが、彼らの指導者たちは違いました。悔い改めてイエスの弟子になれば失うものが多かったからです。イエスは彼らがご自分を拒絶し、弟子たちを迫害することを知っていました。そしてまさにそれが起きるのです。

次のセクションの11章から13章で、マタイはイエスに対する人々の様々な反応を記しています。ある人々はイエスを愛し彼こそメシアであると信じました。バプテスマのヨハネやイエスご自身の家族はより中立的です。イエスは彼らが思い描いていたようなメシアではないと言います。パリサイ人や律法学者たちの反応は完全に否定的でイエスを拒絶しました。彼らはイエスが人々を間違った方向に導く偽教師であり、ご自身についての発言も神への冒瀆だと思いました。しかしイエスはこれらの様々な反応に驚きも落胆もしませんでした。むしろ13章の3つ目の長い教えの中でそのことについて焦点を当てておられます。マタイはここに神の国にまつわるイエスの様々な例え話を集めています。異なる土地に蒔かれた4つの種のたとえやからし種のたとえ、真珠のたとえ、埋められた宝のたとえなどです。これらのたとえは、11章と12章に記された出来事を解説しています。ある人々は、神の国の価値を理解し、意欲的にイエスを受け入れ、ある人々はイエスを拒絶します。しかし、神の国はいかなる障壁によっても、その拡大が止まることはありません。

これが、マタイの福音書の前半です。さらに読み進めていくときに注目してほしいポイントがあります。マタイはイエスを旧約聖書の延長上に置き、預言の成就として描いているということを学びました。ですからマタイが旧約聖書からどのように引用しているのかに注目してみてください。そうすればそれがこの福音書の重要なポイントに配置され、イエスがどのような方かより深く説明していることに気づくでしょう。引用箇所を見つけたら旧約聖書のその部分を開いてみましょう。文脈の中で改めて読むと、興味深いつながりに気づくことでしょう。そして、イエスを受け入れて従う人はどういう人々か、注目してみましょう。ほとんどの場合、それは取るに足りない無名の者たち、または宗教的ではない人々であることに気づくでしょう。彼らはイエスへの信仰によって変えられ、イエスに従っていきます。そして、宗教的でプライドが高い人たちはイエスにつまずくのです。では、このイスラエルの宗教指導者たちとイエスとの緊張関係はこの後どのように発展していくのでしょうか。それこそがマタイの福音書の後半の内容です。

## 【要約】

この文書は、イエス・キリストの人生、死、復活に関する内容をまとめたもので、著者は古代の取税人マタイとされています。マタイはイエスの生涯についての情報を、三十年から四十年にわたり口伝で伝えられたものを編集し、特定のテーマに焦点を当ててまとめました。

福音書は、神とイスラエルの歴史の中での約束の成就をイエスによって強調しており、彼がダビデの血統であるメシアであり、モーセのような教師であり、また「インマヌエル」として私たちと共にいる神であることを記しています。

文書は五つのセクションに分かれ、前後に導入と結論が配置されています。各セクションはイエスの長い教えで終わっており、その教えがマタイのテーマに関連しています。マタイは、イエスが新しいモーセであることを強調し、トラーを完成させる者であることを示しています。

最初のセクションでは、イエスが神の国の訪れを宣言し、神の国の概念を紹介します。次に、イエスが神の国を日常生活に実現させる方法を示し、神の国の力を示す九つのエピソードが挿入されます。弟子たちに対して神の国を宣伝する方法についての教えも含まれています。

その後、マタイは人々の異なる反応に焦点を当て、イエスを受け入れる者、中立の者、拒絶する者の例え話を通じて神の国について説明します。これらのたとえは、イエスの教えと相互に関連しており、神の国の拡大についてのメッセージを伝えています。